

研究結果報告書

遠隔接触場面におけるコミュニケーション・ストラテジー
ー日本語母語話者と上級日本語学習者の会話展開に着目してー

所属： 淡江大学 日本語学科
役職： 助理教授
氏名： 施 信余

【研究テーマ】 「接触場面におけるコミュニケーション・ストラテジー
ー日本語母語話者と上級日本語学習者の会話展開に着目してー」

【研究結果】

従来、接触場面研究は母語話者と非母語話者が同じ空間を共有する、いわゆる「対面」の場合に集中していたが、近年では、日本語による接触場面は一層多様化しつつある。マルチメディアやネットワーク等の技術革新により、日本語学習者が参加する接触場面は、「対面接触場面」に加え、新しく「遠隔接触場面」にまで幅を広げている(尹2002)。遠隔接触場面に関する研究は未だ数少なく、内容面においても、そのほとんどが電話の談話研究である。宮崎(2002)は、「意味交渉は、接触場面で実際に対面する参加者間でのみ行われるわけではなく、ある場面空間を参加者が共有していない場合でも起こり得る」と述べている。

本研究では、ビデオ会議システムを介した遠隔接触場面の特徴を明らかにするために、コミュニケーション・ストラテジーの使用実態を中心に分析を行った。また、今までの接触場面研究は誤用分析を行うケースが多かったが、「誤用分析」は各場面の表層に現れた一部の言語問題だけに焦点を当てているなどの欠点が指摘されている(ネウストプニー、1981)ことから、フォローアップ・インタビューなどの質的分析に適した「グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Grounded Theory Approach)」という方法論を用いることとした。遠隔接触場面には、どのようなコミュニケーション問題が存在しているのか、日本語母語話者と日本語学習者は円滑なコミュニケーションを図るために、それぞれどのようなコミュニケーション・ストラテジーを用いているのか、その相互作用のプロセスを考察することが、本研究の目的である。

分析の結果、日本語レベルに差がある学習者間の言語ホスト対言語ゲストという役割関係は固定化したものではなく、時には交替することが明らかになった。つまり、学習者の考えている内容を重視する活動においては、日本語レベルが異なる学習者間の言語ホスト対言語ゲストという固定化した関係は崩れる可能性が示唆されているのである。

従来接触場面研究では、言語形式に関わる形式的な意味交渉だけに注目することが多かったが、そこでは、意味交渉の達成には日本語能力が問われることになり、言語ホスト対言語ゲストの関係が生じやすい。一方、本研究では、各話者の考えている内容を伝え合う際に行われる内容交渉にも焦点を当てたため、言語ホスト対言語ゲストという固定関係を崩すことができたと見えよう。

【参考文献】

- 尹智鉉(2002) 「遠隔接触場面における日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジー」 『社会言語科学会第10回研究大会予稿集』 社会言語科学会、21-23.
ネウストプニー J.V. (1981) 「外国人場面の研究と日本語教育」 『日本語教育』 45号、日本語教育学会、30-40.
宮崎里司(2002) 「第二言語習得研究における意味交渉課題」 『早稲田大学日本語教育研究』 創刊号、早稲田大学大学院日本語教育研究科、71-89.

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

1. 「接触場面における日本語学習者の調整行動—日本語母語話者と台湾人日本語学習者の会話より—」・施信余・2013(平成25年度)第6回日本語教育学会研究集会・2013年8月31日・京都外国語大学(京都)
2. 「接触場面における調整行動—台湾人日本語学習者と日本語母語話者の会話より」・施信余・台湾日本語文学会第305回例会・2014年4月19日・台北市YMCA城中會所
3. 「接触場面における日本語母語話者と台湾人日本語学習者のインターアクション—調整行動の分析を中心に—」・施信余・日本比較文化学会第36回全国大会・2014年6月14日・北九州国際会議場

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

1. 「遠隔接触場面の話し合いに見られるコミュニケーション・ストラテジー—調整行動の分析を中心に—」・施信余・『台湾日本語文学報』33号・2013年12月31日

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

なし。